

# ニタイ・ト

# からの「お便り」

第1号

☎487-2332



塘路湖エコミュージアムセンターあることとの共催で、クイズスタンプラリーをおこなっています。全問正解すると景品がもらえますので、お時間ある方は挑戦してみてください。(高橋)

新しくタイトルを  
リニューアル!

## 「ニタイ・トからのお便り」

をよろしくお願ひします

標茶町郷土館から標茶町博物館ニタイ・トへ変わった事を受け、これまで掲載してきた「大川のほとり郷土館だより」は第78号をもって終了とし、今号より「ニタイ・トからのお便り」となりました。これまで通り約3カ月に一度のペースで、博物館情報やしべちやの歴史や自然のコラムを掲載します。



## 大発生! キマダラヒカゲ

今年7月をピークに大量発生した茶色い地味なチョウ、実は2種類飛んでいたのをご存知でしたか?一見すると同じチョウに思えますが実は種類が分かれています。これらのチョウはそれぞれ、ヤマキマダラヒカゲとサトキマダラヒカゲというタテハチョウの仲間です。

チョウの判別は主に、羽の模様の違いや、個体の大きさなどによって判別することができますが、この2種のチョウは模様だけでなく、大きさなども似ているため、ヤマカサトか判別するのはとても難しいチョウです。

見分けるポイントはいくつかありますが、比較的わかりやすいポイントが写真の中、赤丸で囲ってある部分です。



サトキマダラヒカゲ



ヤマキマダラヒカゲ

この3つの丸が、サトは直線かゆるやかなカーブを描くようにならんでおり、ヤマは「くの字」に見えるような並びになっていることが多いです。ただし、この3つの丸の並びにも個体差がありますので、ほかの見分けポイントも見て、総合的に判断するのが一般的な判別方法です。

博物館に訪れた方の中には「害虫なのでは…」と農作物への被害を心配している方もいらっしゃいましたが、幼虫が食べるのは主にタケ・ササ類なので、特に害虫として指定されている虫ではないようです。

近代日本馬術の創始者 <sup>ゆ</sup> <sup>さ</sup> 遊佐 <sup>こう</sup> <sup>へい</sup> 幸平

標茶で最も古い人々の生きた痕跡は、8千年近く前の縄文早期までさかのぼることができます。以来この地では多くの人々が生まれ、暮らし、そして亡くなっていきました。中には一時期の間、標茶に居を構えた人々もいた事でしょう。多くの人々の生活によって、この町も形作られ、標茶だけの歴史が生まれました。

標茶に生きた人々の中には、伝記のような形で記録が残されている方もいます。標茶と関わりを持った人生の物語をご紹介します。

遊佐幸平は、1932～33年（昭和7～8年）に軍馬補充部川上支部の第12代支部長として勤務した日本陸軍の軍人です。遊佐は陸軍騎兵隊に所属し馬術家として知られていました。自らの技術を馬術書という形で執筆し広く馬術教育の普及に努めたほか、オリンピック競技への参加を目標に掲げて指導を深めたことから、日本近代馬術の創始者とも言われています。遊佐幸平が指導した弟子の中には、第10回ロサンゼルスオリンピックの大障害飛越競技で金メダルを獲得したバロン西こと西竹一がおり、遊佐は戦前の馬術競技における第一人者でした。

遊佐は1883年（明治16年）に宮城県玉造郡鳴子村（現鳴子町）に生まれました。1897年（明治30年）に仙台にあった陸軍幼年学校に入学後、1904年（明治37年）、21歳となった遊佐は陸軍士官学校を卒業。騎兵少尉に任官後、日露戦争へ従軍。30代になると、馬術研究のためフランスへ長く滞在したほか、蒙古馬の研究のためモンゴルや中国東北部への出張、ロシアシベリア地方へ馬の能力調査のため出張するなど、馬術と馬の資質に関する調査研究を深めます。そして1928年（昭和3年）に行われた第9回アムステルダムオリンピックにて、馬場馬術競技の選手兼監督として初出場しました。この時遊佐は45歳。日本馬術会では広く名の知られる存在であり、また軍人としても騎兵中佐となっていました。

1932年（昭和7年）、遊佐は軍馬補充部川上支部長として標茶へ赴任するその年に、第10回ロサンゼルスオリンピックが行われます。遊佐は馬術競技の日本代表監督として臨みました。



標茶で撮影された  
遊佐幸平(1932年頃)

## インターンシップ

標茶高校2年の井崎直哉さんにインターンシップで体験したことを振りかえってもらいました。

## 5日間で学んだこと

自分は7月30日から8月3日までの5日間のインターンシップで、さまざまな活動を体験させていただきました。インターンシップの前までは、博物館の仕事に対して具体的なイメージがありませんでしたが、体験を通していろいろな仕事がある事を知ることができました。

最初はまだ何をやるかよく解らず、とても緊張していました。ですが、館内の温度を測る仕事をしたり、博物館について多くの事を教えてもらい、少しずつ慣れることができました。その後、受け付けの仕事などを体験させていただきましたが、声がかなり小さくなってしまいう事が多くあり、緊張のしすぎが自分の一番の課題だと感じました。ですが周りの方々のおかげで3日目からは慣れることができました。

この5日間を通して仕事をする大変さや、やりがいを知りました。最初は場になじむことができるか不安も多かったのですが、職場の方々には気を使っただき、とても学びの多い5日間でした。将来自分が就職した時は、今回体験したことを仕事に活かしていきたいと思います。



◆◆ 標茶高校2年生 ◆◆

井崎直哉